

大阪市立大学山岳会ニュース

OCUAC NEWS

NO. 35 2002.12.18

ラサ〜カシュガル「天上のシルクロード」 4000キロの旅 小林 深

期間 : 7月30日〜8月20日

メンバー : とやま山の会 3名と小林の4名

ガイド、通訳、運転手3名 ランクル3台

1) ラサ〜タルチェン (カイラスの登山口) 7月 31日〜8月6日

飛行機でいきなり3700mのラサに下りたので、ホテルの階段を登るだけで息苦しさを感した。ラサの市街はすっかり中国化してしまって、旧市街のチベット族居住地域に行かないとチベットへ来たという感じがしない。その中心であるジョカン寺へ行くと、チベット中からお参りに訪れた人々で、雑踏していた。五体投地をしながらジョカン寺を廻っている人も居て、チベットが実感できる。

チベット高原は4500m以下の所はほとんどないと言う高地で、遊牧民の住む緩やかな山波の草原地帯があるかと思えば、急峻な山岳地帯や砂漠状の荒野、濁流の渦巻く大河など、ありとあらゆる地形の混在したところでした。唯一の共通点は樹木が全くないことである。そんな高地が3000キロも続き、まさに世界の屋根だと実感させられた。

今年はモンスーンが強くて、雨が多く、道路は滅茶苦茶に荒れていて、まるでオフロードラリーをやっているような場所が多かった。我々も運転を交代して効率よく走ろうと考えていたが、素人には手も足も出せない所だった。渡河あり、泥沼あり、道路崩壊あり、川の中での座礁ありで、時には僅かの轍を捜しながら草原や砂漠をウロウロ、その上、ポンコツ車で故障が頻発、宿泊地の到着は毎晩11〜12時頃という有様であった。残念なこ

とに、期待したヒマラヤ山脈はドブプリ雲に覆われてほとんど見えなかった。



600ミリまでレンズ持って行ったのに、使うチャンスはゼロでした。

2) カイラス巡礼 8月7日～8日

今年は13年に1度のウマ年であり、カイラスにすべての神々(仏)が集まってくる年である。そのため、今年の巡礼は1周が例年の13周に相当すると云うので、1日1万人もの巡礼者が歩いているとの事であった(実際は数千人位?)。チベット中から、一族郎党が集団でトラックをチャーターして、野宿しながらやってくる。一生一度の大旅行らしい。

その52キロの道を、巡礼者達は楽々と1日で廻ってしまう。しかも、折角来たからと5周も10する周もするらしい。我々は2日で廻ることにして、1日目はカイラス北面が綺麗に見えるティラ・プク・ゴンパ(5210m)で泊まる。1週間も5000mの高地に居たので、翌日のドルマ・ラ(5668m)越えはそれ程の急坂でなかった事もあり、意外と楽に登れてしまった。しかし、峠からの長い長い下り道にはうんざりしてしまう。

チベット人たちは、子供から老人まで、こともなげにスタスタ歩いており、そのタフさにはあきれてしまう。10歳くらいの子供が2歳くらいの幼児をおぶって歩いていたりする。大麦を煎った粉をバター茶で練り固めたツァンパしか食べていないのに、何処からエネルギーが出てくるのだろう。

彼らには外国人である我々が珍しくて仕方ないらしく、注目の的にされる。タシデレ(コンニチハ)と云うと、皆嬉しそうにニコニコして大きな声で応えてくれる。純朴で、人懐っこくて、温かな心の、信心深い人々であった。それが、この旅で一番印象に残ったことであった。チベット自治区に大挙入植して来てチベット人よりも多くなってしまった中国人も、観光客も一人も居なく、そこはチベット人だけの世界であった。

3) グゲ遺跡～カシュガル 8月9日～19日

後半のハイライトはグゲ遺跡、グゲは8世紀に生まれたチベット最初の王国であったが、17世紀に滅亡した。道路崩壊で通行不能と云うのを、ガイドを説得して強引に行く。ここはさらに凄惨な地で、行き交う車は終日1台もなかった。5000mを越える山中の物凄い悪路を1日かけて突破、深夜12時にピャン村に

辿り着いた。翌朝、明けてみたら村の裏山に崩れかけた洞窟が無数に見えた。幾ら交渉しても見学許可が貰えなかったピャン遺跡であった。1000以上もある洞窟は、まだ調査が終わっていないそうだ。たまたま泊めてもらった家が、管理人の家だったので内緒で遺跡を少しだけ見せてもらう。さらに隣村のドンカル(洞窟)も少し見せてもらった。真っ暗な洞窟の中に、素晴らしい色彩の壁画があった。

次いでサトレジ川(カンジスの最上流)沿いにあるグゲの遺跡を訪問、ここは見学可能になっていた。グゲもピャン・ドンカルも毛沢東の紅衛兵がやって来て徹底的に破壊した後、僅かに難を逃れた壁画と云うことであったが、見るものを圧倒するような美しさがあった。グゲ周辺はサトレジ川を挟んで兩岸に、侵食により形成されたチョルテン群(仏塔に似た岩)が延々と連なり、壮大な景観をなしていた。すっかり満足して、ツァンダを後に新蔵公路へ引き返す。

軍事基地の町、アリを過ぎてインドとの国境紛争地域に入ると、中国軍による道路建設工事が盛んに行われていた。衝突時のための軍用道路なのであろう。ほとんどが草も生えない不毛の丘陵地帯で、遊牧民も全く居ない。こんな役にも立たない土地を、何のために争っているのだらうと思ってしまう。K2に一番近い村、マザルでもカラコルムの山々はモンスーンの雲に隠れて何も見えなかった。

タクマラカン砂漠に出る最後の山地を通過中、崖崩れと巨大な落石に遮られてしまう。前を走っていたトラックが通過した直後、我々との数分間に起きた崩壊で、間一髪で助かったのであった。運良くショベルカーが3時間程して到着した。運が悪いと、3日位は閉じ込められてしまうらしい。そんな地域である。開通までに9時間も掛ってしまう。

タクマラカン砂漠の天山南道は、コンクリートの舗装道路になっていた。古のシルクロードの面影は消えつつあるようだ。アーバンからカシュガルまで、100キロ以上のスピードで走る。

カシュガルは人口40万人の大都会、新旧ゴチャゴチャの混沌の最中であつた。古いウイグルの町並みが壊され、コンクリートのビルに変わりつつある。あと5年もしたら異郷感のないコンクリートの都会になっているだろう。日曜日の大バザールは、旅人を満足さ

ずには充分であった。訪れるなら今の内である。印パ紛争のあおりが原因か、パキスタンとの国境、クンジュラ峠は封鎖されていた。

ブータン紀行

広谷光一郎

6月15日バンコク空港で、橋本信行氏と合流。いよいよブータンに入ることとなった。橋本氏とは昨年夏、オーストリア、ウィーンで逢って以来のことである。

今回のブータン行きは、私にとっては昨年来の宿願であった。何故なら、昨年JACの仲間と計画し、直前、S字結腸癌手術のため、私のみ参加できなかったからである。このようなことで、今年は我々のグループ4名（1998年ポカラトレック、1999年フンザ・カラコルム、2000年カシュガル・クンジュラ・パスなどに同行した仲間）の他、歯科医グループ5名が加わった計画となり、男性4名、女性6名のニギニギしい旅となった。

バンコクよりカルカッタ経由で、ブータンの玄関パロに。シャキムよりブータンに入る機中より、モンスーンの雲海中にチョモラリ（7,314m）の美しい山容を見ることができた。

パロより専用車にて約2時間、首都ティンブーヘ。ティンブー（2,200m）は首都とはいえ、人口約4万人（ブータン人口60万人）、街のたたずまいは、ネパールでもなく、チベットでもない。

何故だろう。

ブータンは30年前までは自動車の通れる道路がなく、町といえる町がまったくなかった。

つまり、ティンブーは人が集まるから町ができたのではなく、町作りをして、人を集めたというのが実情らしい。

従って、カトマンズやラサのような自然さがないのであろう。宿に着いたら懐かしい小方全弘氏の置き紙があった。「貴兄の到着を待ったが、下痢で体調悪く、常宿のイージン・ゲストハウスへ戻ります。都合付けば

連絡下されたし」であった。

ここで小方氏について触れておこう。

彼は私と全く同年輩である。同志社山岳部のOBで、私と親しくなったのは彼がJACの理事として横有恒氏の秘書役をしていた頃である。以来、理事会で関西の大学の海外登山について議論したものである。しかし、数年後、彼は突然我々の前から姿を消したのである。

何が彼をそうさせたかは定かではなかったが、1968年、彼は政府高官に招かれ、ブータンに入国、その後、現国王の戴冠式も含め十数度にわたって入国、ブータンの人々との親善的役割を果たしたのであった。（丁度、コロンボ計画で1964年着任した西岡京治氏と前後している）

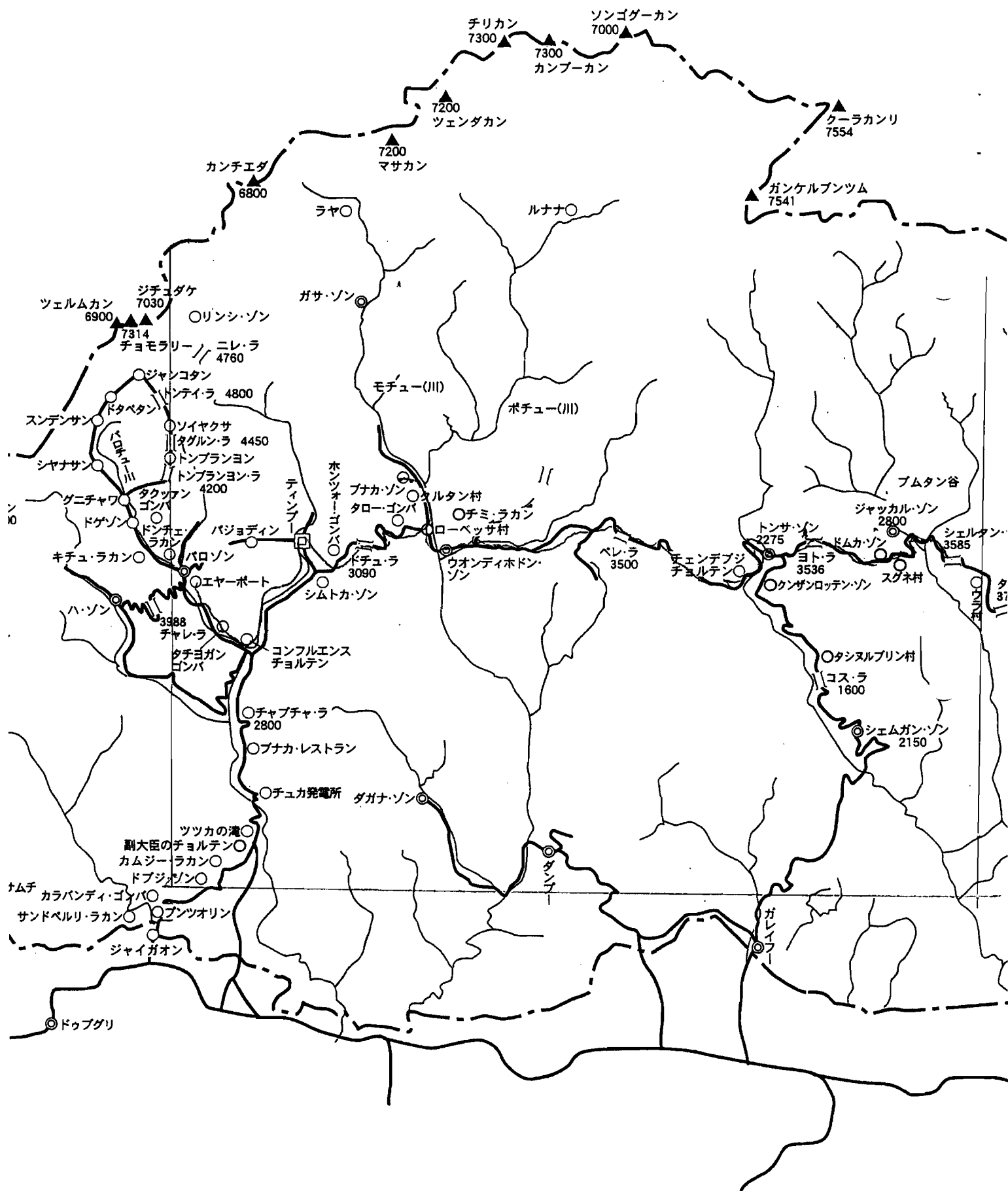
そして、6年前、1996年よりデンブーから75kmの地点にあるプナカに居住するようになり、ブータン大蔵省の相談役をかつていたのである。夜、彼の招きでイージン・ゲストハウスに行き、夕食を共にし、35年の空白を埋めたのであった。翌17日、ティンブーからプナカ、そしてトンサへ210km6時間のツアーである。

途中ドチュ・ラ（3,200m）ではブータンの最高峰ガンカ・プンスム（7,541m）の眺望が期待されたが霧のため見ることはできなかった。峠の茶屋には京大のマサ・コン（7,194m）登頂記念の双眼鏡が設置されていた。

私は小方氏のパジェロに乗り換え、シャクナゲや古木の美しい原生林につくられた道路を徐々に高度を下げながら、やがて棚田が広がるプナカ（1,350m）に到着、彼の口利きでプナカ・ゾンに入ることができた。

プナカ・ゾンは幾度も災害（火災、地震、水害など）を受け、改築が繰り返されてきたゾン（城塞）で、ゾン最奥部には大きな講堂があり、本尊の仏陀が安置されていた。このゾンにはシャブドゥン（17世紀の頃の高僧でブータンを統一、各地の要所に戦略的、政策的拠点としてゾンを作った。また、ブータンではこの僧の転生仏を最高権威としている）が、チベットから持ってきたという観音菩薩の像があり、これはブータ

ブータン王国全図



ン人はもとよりチベット世界全体に重要な存在と見なされている。

ブナカ・ソンからパジェロで約15分の高台に小方氏の家はあった。立派な3階建て、1階はブナカ・ソンのNo2の高僧家族が住んでおり、彼はお手伝いさんと2階を居住としていた。

私たちは、しばしばビールを片手に、旧交を暖め、別れを惜しんだのであった。

無数のダルシン（タルチョのこと）の立てられたペレ・ラ（3,350㍎）を越え、トンサに近づいたことがわかったのは、深い溪流を挟んで、見事にそびえ立つトンサ・ソンが見えた時である。このソンはブータン以東から入ってくる人々の入り口に控える堅固な関所であり、同時にこの地域の行政府であったのである。

しかし、この谷の向こうへ行くためには30分も迂回しなければならなかった。行程のほとんどが小さな村を縫うように走ってきたのだが、この辺りからブータンの田舎の暮らしがおのずとみえてきた。

山腹にへばりつくようにポツン、ポツンと建っている民家は規模が大きく立派である。特徴としては、石積みなどの土台部分の1階は家畜小屋や物置に、木枠組の木造部分の2階は居室で、多くは2～3階建てで、屋根裏をもうけているようである。木造部分は最も特徴があり、内外ともに細かい装飾や着色が行われていて、非常に華やかである。

ブムタンではオーナーの名前で呼ばれているレキワンモロツジに2日間の宿泊となった。夜は真赤に焼いた石を入れて湯を沸かすという石風呂を貰い、久方振りの寛いだ一時をもつことができた。

6月19日、ニマルン僧院のお祭りを見るためのハイキングが企画された。ロッジから1時間、道路から10分程川面に向かいチュメ・チュ（川）にかかった吊り橋を渡り、急な山道を25分程登った山の中にニマルン僧院があった。1900年にチベットから招かれた活仏、ドーリン・トウルクが開設したと言われている。この日の祭りはツェチュ（グルの祭り）ではなくチャム（仮面舞踊）である。近隣の村々から大勢の村民が祭りを楽しみにやってくる。

内容は諸尊が踊り手に降臨し、その力で悪霊を鎮める

というセリフのない舞踏劇である。

チャムの合間にはキラ（女性の民族衣装）で盛装した村の乙女たちによる歌や踊りが催される。そのほか「アツアラ」と呼ばれる道化達が大変面白い演技で観客を笑わせるが、ペニスの撥と太鼓で若い女の子を追いかたりして、観客と舞台を結ぶ役目をする。私たちは始めて見るチャムにシャッターを夢中で切ったのであった。

6月20日、この日は当所から企画していたクジュラカン（僧院）でのグル・リンポチュの祭り「ツェチュ」を見学してワンデコルポダンへもと来た道に戻るのである。ここで、ブータンの仏教について解説してみよう。

結論から言うと、大乘仏教を国教としている。その伝来は日本より一世紀遅く7世紀前半の頃とされている。ブータンの1年間の祝日のうち、建国、新年、春分……などといった暦関係のものに比べて釈迦の誕生、成道、出家といった仏教関係のものが非常に多く、この祝祭日の中で特異なのがグル・リンポチュのツェチュ祭りで、全国同じ日ではなく、各県ごとに日が異なり、しかもこのツェチュ祭りが最も盛大なのである。

グル・リンポチュの生涯は、不明な部分が少ないが伝えられるところによれば、パキスタンのスワット地方の北西にあるダナコーシャ湖の蓮の花から8才の子供の姿で生まれたとある。国王の養子として迎えられて成長してから国政まで委ねられているが、結局はインドに赴いて出家する。そこで、多くの師のもとで顕教、密教の修行に励み高僧となる。（仏陀とよく似た運命である）。8世紀後半、チベットに赴いた師は、土着の鬼神を調伏してチベットに仏教伝播の礎を築く。そして、チベットに限らず、ブータン・ネパールを含むヒマヤラ地域一帯に密教系の仏教を流布するのに大きく貢献したのである。

チベット・ブータンの仏教では、釈迦の生涯に起った誕生、出家、成道、涅槃という12の重要な出来事を追うことによって描かれているが、同様にグル・リンポチュの生涯も12の出来事に要約される。

しかし、釈迦と本質的に趣を異にするのは釈迦が涅槃という形で生涯を終えるのに対して、グル・リンポチュにはそれがないのである。つまり、グル・リンポチ

ユは密教を広め、現在も師はそこに座するというのである。すなわち、この世を去るにあたって「月の十日に法要を勤める人のいるところには必ず戻ってくる」という言葉を残したので、信者にとってはグル・リンポチェは遠い存在ではなく、身近な感じで接しられるのである。

以上のようなことから、「ツェチュ」は毎月の法要であり、各地で特定の月と日を定め、休日となし、盛大に行われるのである。目を見張るような500畳はあろうかと思うトンドル（グル・リンポチェを主尊に刺繍で描かれたシルクの大掛物）が開帳されていて、広場には2～300名の僧が鎮座し、高僧の読経と打楽器による荘厳な法要が行なわれている。

法要が営まれるうちに人々はトンドル（大掛物）の前に進み、その裾を額にいただいて、グル・リンポチュの加護を、そして家族の無病息災を祈願するのである。伝によれば、この祈願により、生まれてから今月までの悪しき事全てが許されるとのこと、本日古希を迎えた私にとってはこの上なき祈願となった。（甚に、グル・リンポチェの誕生日は6月20日である）

お祭り後、夕方、ウオンデイフォダンの川添いにあるリゾートホテルに到着、夕食会は私の祝古希、誕生祝いを盛大にさせていただき、この上なき幸を感じたのである。翌6月21日専用車でもと来た道をパロに戻り、22日バンコクで橋本氏と別れ、この旅は終わった。念願のブータン旅行では期待していたヒマラヤの山々を見ることはできなかったが、物乞いしない子供達、民族衣装でオシャレな人々、素朴な村々、信心深い人々と多くのゾンや僧院。

何ととっても素朴な風情は私が忘れていたものを思い起こさせてくれたようである。

橋本兄よ、来春はランタン・リルンに行こう！ 以上

—ピサンピーク試登—

藤本 勇

女房とジョムソンからトロンパス（5400m）を越してマナンに入り、ピサンピークを仰いだのは1995年の夏であった。それ以来、頭の中ではピサンピークの姿が消えなかった。女房はフランスへの旅に1ヶ月間、出かけることになったので、急遽ネパール行きの格安券を購入した。今回は一人旅である。

カトマンズにて

2002年6月23日 ロイヤルネパール便でカトマンズ空港に降り立つ。イミグレには4月から JICA のシニアボランティアで赴任した北濃君が出迎えに来てくれていた。

翌日、日本からの登山隊の大半のお世話をしているコスモ・トレックに出向く。馴染みのシェルパやポーターが遊んでいた。すぐに彼らに7月の予定を聞くと「何も仕事がないので一緒に山に行きたい」と申す。早速、彼らとピサンピークの準備にかかる。テントや炊事用具などは大阪山の会の物を使わせて貰う。

ピサンへ向けてトレッキング

メンバー 藤本 勇(67)

クライミング・シェルパ

ツル・バハドル・タマン(36) 通称ツル君

キッチン・ボーイ

アリ・バハドル・チャムルガイ(31) 通称アンタレ君

6月30日 カトマンズから空路でボカラに着く。

ボカラでジョムソン行きのフライトを待ったが3日間キャンセルが続く。その間、5月末に仮オープンした国際山岳博物館を訪ねる。

7月3日 ボカラ→フルブレ

早朝のジョムソンフライトは今日こそ飛んでくれると期待して空港に行く。やはりジョムソン周辺の天気が悪くキャンセル。これではピサンに何時着けるかわからないので、下山に使う予定であったコースを登る

ことにする。少しでも今日中に行けるところまで歩きたいのでタクシーを利用してベシサハールに向かう。

7月4日 フルブレ→シャンゲ

フルブレからナディの道を「この道はいつか来た道 あーあそうだよ」のメロディを口ずさみながら歩く。ナディからバウンダダまではだらたらした登りが続く。約450米の標高差があり、最後の登りはサウナに入っているような汗をかく。暑い。暑い。

7月5日 シャンゲ→タル

今日は一日、下痢の症状が出て元気がない。朝の涼しい間にピッチを上げる。ジャガードには2ヶ所温泉が沸いているようだ。

アンタレ君は前を歩いたり、後ろを歩いたりしていたが、荷物が重いのか時々休む。もっとも主人の私の動向を注意深く見守るためでもある。ツル君は私の後や横をきっちりと歩いて、少しでもバランスを崩しそうになると手をさしのべる。

タルの手前の4キロほどの所はマルシャンディ河の河幅が狭くなり、ゴルジュ状の所を急流が流れている。またタルの部落の所では河床が広がっていた。

タルにチェックポストあり。台帳をみると殆どが外人。日本人はいない。年齢も20-30代の若者。ロッジに着くなりツル君が私の汚れたものを洗濯してくれた。久しぶりにホット？シャワーを浴びる。気分爽快。

7月6日 タル→ダナキュ

昨日の洗濯物は乾いていない。下痢の症状はまだ治まっていない。昨夜、アンタレが作ってくれた「おかゆ」と梅干しが美味しかった。

日陰の間は快調に歩ける。カルテからダラパニまでは左岸の日陰の道を歩く。昼食は注文してから飯をたたくので2時間近くはかかる。その間に昨日の洗濯物を乾かす。

ダラパニからはマナスルのサマ部落に通じるラルキヤラへの道があった。ここから奥にはロッジやパッティはないようだ。

7月7日 ダナキュ→チャーメ

ダナキュからは登りの連続。標高が2200米を越したので昨日までのような汗はかかない。マルシャンディ河からの吹き上げる風が汗を引いてくれる。南アルプスでも歩いているような松林や杉の木の樹林帯がある。白い花が咲き乱れ、疲れた身体を癒やしてくれる。一人旅は話し相手がいないので寂しい。今日もトレッカーの姿を見かけなかった。

チャーメの入り口にはネパール人専用のチェックポストあり。警察と軍隊がネパール人の荷物の中身を一人づつチェックしていた。マオイストの影響で、このようなポストが出来ていた。チャーメはマルシャンディ沿いでは一番の村。街道の両側にはホテルやロッジの看板が立ち並び、銀行・学校もあり。宿にはテレビが置かれて昼間から子供がテレビを見ていた。また、電話局があってツル君はカトマンズの自宅に電話を入れていた。

宿でツル君とピサン・ピークの登攀計画を練る。果たして上手く登頂できるだろうか。

7月8日 チャーメ→ピサン

やっと朝の便が普通にもどった。これも2日間、おかげで梅干しで静養したからだろう。

タレクからブラタンまでは一軒のパッティもない。静かな山旅を楽しむ。マナンの方から下りてくる現地人の姿を時おり見かけるだけでトレッカーの姿は見ない。上高地のどこかを歩いているようで道幅も広く、道には松葉が敷き詰められて20センチ以上もある松ぼっくりが転がっている。

ドクレポカリの手前の左岸は見覚えのある大きなスラブ岩が数キロに及ぶ岩壁が聳えていた。ピサン・ピークの山すそが見えた。BC予定地は雲の中である。

ピサン部落の入り口近くの「Hotel Maya」というロッジをベースハウスに決めた。高度計は3120米を記していた。

ピサン・ピークの試登

7月9日 晴れ

朝、目が覚めると部屋の窓からピサン・ピークが見えたので、あわててカメラを用意して外に出ると雲に覆われてしまった。ピサン・ピークの頂上は6091米である。地図で調べると上高地の河童橋からピサン・ピークを仰ぐと、丁度、奥穂高小屋の位置にピサ

ン・ピークがある。なんと河童橋から標高差で奥穂高岳が1600米なので、さらに1400米も加えた高さにピサン・ピークがある。日本では信じられないほどの大きな山である。

朝食後、装備・食料の点検をして、不足の食糧をピサンの村で調達する。

今夜は久しぶりにチキンを一羽つぶしてご馳走を食べる予定であったが、ツル君に「山に登る前だから殺生はやめましょう」との一言で断念する。

7月10日 くもり時々晴れ

ピサン(7:10)―主尾根との最低鞍部(9:05 - 9:15)―一段目のコブ(9:30)―二段目のコブ(9:55 - 10:05)―BC 予定地(10:45 - 11:10)―引き返し点(12:15 - 12:20)―BC 予定地(12:45 - 12:55)―主尾根の科尔(1:20 - 1:40)―ピサン(2:45)

今日は高度順応のために全員、空身で登れるところまで登る予定で出かける。

雲が低くたれこめて上のピサン村近くまでガスがかかっている。3400米あたりの樹林帯をななめ左に登り詰めると、主尾根の末端の赤茶けた岩壁のすそを巻く。そこを登ると主尾根との最低鞍部にいたる。この科尔で高度計は3750米を記していた。

振り返るとアンナプルナ2峰が高く、雲の中に聳えていた。ここからの主尾根は三段のコブがあって BC 予定地は三段目のコブの裏側にある。4000米近くになると酸素が薄くて登りになると息が苦しい。出発したピサンの村が眼下に見える。

BC の手前には馬が草を食っていた。また、モンスーンの今の時期は高山植物が咲き乱れる時期でもあってお花畑が美しい。白、黄、赤、青などの可憐な花が今を盛りと咲いていた。2年ぶりにブルーポピーにも再会した。

BC 予定地はカルカの石積みがされていて、私達のテント場にはタルチョーの旗がなびいていた。高度計では4150米を記していた。ロッジで作って貰ったチャパティを食べて、さらに上へと登る。芝生のような草地の斜面をガラガラと登る。放牧されていた牛が数頭、私達の所に寄ってきて何か食べる物をねだっている。ツル君は「塩をねだっています」と云っていた。

あまり無理することもなく高度計が4500米を示している地点で引き返すことにする。1日で1400

米の上り下りを8時間ほどでやると、やはりシンドイ。

7月11日 くもり

ピサン(8:05)―最低鞍部(10:30 - 10:45)―二段目のコブ(11:25 - 12:00)―BC(12:45)

今日はBC 建設の日。最低鞍部の手前150米ほどのところの急登は今日も苦しい。BC の手前で咲き乱れる高山植物の写真を撮る。

BC に着くや、ツル君は手際よくテントを設営する。アンタレ君は35L と10L の水タンクをもって往復1時間の水くみに出かける。帰ってきて35L のタンクを持ち上げようとしても、私の力ではピクともしない。彼は軽々と45L の水を運んで来てくれた。

ツルとアンタレの二人は石を積んで立派なキッチンを作った。石囲の上に防水用ブルーシートをかけた。

7月12日 終日ガス、時々小雨

視界5米ほどのガスの中、モーニングティで目が覚める。頭痛もなく、目の腫れもなく高山病の症状が出ていない。コーンスープにラーメンで朝食をとる。

ツル・アンタレ両君はガスの中、ピサンの宿に残してきた荷物を取りに行く。ここのカルカは最近では使われていない。というのはピサン周辺の人は香港やシンガポールに出稼ぎに行って、裕福になった。

過去の登山隊がBC で牛や馬にテントを荒らされた記録もあり、私は終日テントの守をする。山は相変わらずのガスで今日一日アンナ2峰の姿は見せてくれなかった。

7月13日 晴れ

BC(7:25)―先日の引き返し点(8:15 - 8:25)―ザレ場のトラバース地点(10:10 - 10:10)―ABC(10:25 - 10:35)―BC(11:50)

明け方3時頃に用を足しにテントの外に出るとピサンピークの方に星が輝いていた。今回の旅で星を見るのは初めてだ。6時にシェルパ達が起き出して「山が見える」というので飛び出すとアンナプルナ、ラムジュンヒマール、ガンガプルナ、アンナ4峰までも見えた。久しぶりにカメラで山を撮る。

今日はABC に荷揚げの日。ツル君がザイル、ピッケル、アイゼンなどの荷物30キロを持って荷揚げす

る。アンタレ君は午前中BCのテントを見守り、午後になってから水場で35キロの水を汲んで荷揚げする。私は相変わらずリュックの中は雨具の上下、薄手のフリースの上着、防風着、水筒、カメラ。ミノルタの一眼レフは古いので重い。

主尾根はまるで雪の消えたスキー場のようだった。唐松の八方尾根の斜面を数十倍大きくしたような斜面が続く。私達は広い尾根をただひたすら登るのみ。草地が無くなるのは4700米あたりであった。その後はザレ場をジクザクに登ってトラバース地点に着く。ABCはトラバースしてから主尾根の西側にあった。BCとの標高差は700米。

夜はカトマンズで買ったパスタに日本から持参したソースをかけて食べた。ネパールでは順番などを決めるにはどうするのか分からない。彼らに「ジャンケン」を教える。今回の旅では、この「ジャンケンポイ、アイコデホイ」が流行った。食べる物はなんでもジャンケンで決めて一番になった物が最初に手に入れることにした。共同の物をネパール語で「ハムロ」という。この言葉が流行ったものだ。

7月14日 くもり

BC(7:45)―休憩(8:35 - 8:45)―休憩(9:25 - 9:35)―ABC(10:40)
ABC(12:20)―引返し点(1:50 - 2:00)―ABC(2:30)

早朝は天気がよくて対岸のアンナの写真を撮る。朝食は定番になったポーリッジ、玉子とお茶。快便が出る。

今日はBCを撤収してABCにテントを上げる日である。まるで夏山縦走の時のように、一つのテントを撤収しては次のテント場に運ぶようなものであった。4600米付近で野鳥の玉子をみた。何の鳥だろうか。

トラバース地点までの登りは息苦しく、40歩あるいては一呼吸いれねばならない。4600米付近ではハグレのヤクが一頭いた。ABCに着けばアンタレがテントを設営していた。彼らは二日しか泊まらないのにBCと同じように石積みでキッチンを作った。

簡単な昼食を済ませてから、全員で上部への高度順化に行く。主稜線を忠実に登る。引き返し点では高度計が5250米を記していた。この地点から振り返る

と中央アルプスの宝剣岳と同じような人の横顔をした岩とマナンの方に鉄砲の先を向けた岩があった。

ツル君は「高いところでは頭を暖めた方が高山病になりませんよ」と云うので冬用の帽子をかぶって眠る。二人は相変わらず夜遅くまでチェスを楽しんでいた。

7月15日 くもり

視界10米くらいのガスに包まれている。ここABCは高度計は4900米を記していた。主稜線の岩壁の西側にあってカール状の台地にある。広さは野球が出来る程度の広さがあった。高山病も出ず、今朝も快便がでた。

ツル・アンタレはC1へ高所用装備や水を荷揚げに行く。私は一日休養日。彼らは2時間程度で往復してきた。彼らにとっては5000米くらいならば自分の庭のようである。今までの所、計画は順調に進んでいる。あとはアタックの17日の天気がどうなるか。

ここは牧草がないので馬や牛は上がってこない。静かな別天地でテントの中ではネパール放送の音楽が流れている。一日中ガスに包まれていた。

7月16日 雨のちくもり

夜半に雨、それが雪に変わる。私の寝ている側に積雪。それがテントの内張りを通して寝袋と横に置いていた唯一の防寒具のフリースジャケットを濡らす。乾かすのに一苦労する。今日の予定ではハイキャンプにテントを上げる日だったが、午前中は雨と風つよし。

昼からは雨は止んだが、依然として風は強い。昨日、ハイキャンプに荷揚げした高所用装備と水タンクを取りにツル・アンタレ両君は出かけた。

明日の天気を見てABCよりアタックすることに変更した。私は一日ABCで沈殿。

7月17日 くもり時々雨。のち晴れ

ABC(5:05)―ABCから見たピナクル(5:50 - 6:00)―ハイキャンプ予定地(6:45 - 6:50)―最高到達点(8:05 - 8:10)―ABC(9:55 - 11:20)―BC(12:50)

朝3時に起きてアタックの準備をする。天気悪く視界10米ほど。4時半の出発を用意していたが暗闇でなににも分からないので明るくなるまで待つ。

ABC から見えるピナクルの頂までは、比較的早く着いた。ハイキャンプ予定地の手前の岩場を直登せず左に巻いたが、そこも悪くてガラガラの岩屑だらけで傾斜もきつく、歩きたくない所であった。

ハイキャンプ予定地(5200m)はテントが6張りほど張れる場所であった。高度が5000米を越すと息苦しくなり、数歩登っては一息つかなければならぬ。ハイキャンプを過ぎて、しばらくすると雪まじりの雨と風が強くなってきた。ガスの中でかすかに見えるピサンピークはひととき高く聳えていた。

高度5700米で遂に登頂を断念する。いままで高度順応も順調に出来たのに、最後の段階になって天気に恵まれないとは残念なり。

先ほどの岩場では、ツル君がロープをフィックスしてくれた。2泊したABCのテントを回収してBCに下る。時々、突風のような風が吹き身体のパランスが崩れる。

今回のネパールの旅は当初からトレッキングを主体にして準備をした。まさかツル君のような8000米のジャイアントを三座も登ったクライミングシェルパが同行してくれるとの確証もなかった。せめて、アルファ米を10個ほどと高所用食料を3日分ほど準備して来れば、アタックの日を変更出来たのにとすると後悔の念が頭をよぎる。

BC までの草地で何回も寝ころんではネパールの山の空気を吸い、このピサンピークの山にも来れないかと思うと、何故か感傷的になった。

アンナプルナは今日も姿を見せてくれなかったが、BCに着く頃より天気は回復する。マットを持ち出して日向ぼっこをする。まるで天国にでもいるようだった。

7月18日 晴れ

BC(8:20)ー最低鞍部(9:05 - 9:20)ーピサン(10:30)

夜中の2時に目が覚める。用を足しにテントを出るとピサンの頂上の方に星が瞬いていた。アンタレ君は「サーブは夜中にモシモシと寝言を言っていましたよ」と云う。女房がフランスに旅立ってから彼女の声を聞いていない。

BCのテントをゆっくり撤収する。頂上の方はガス

がかかっているが、アンナやマナンの方は晴れてよく見える。この天気が昨日ならば頂上を踏めたかも知れない。ツル・アンタレ両君は重い荷物を担いでもニコニコ笑っている。8日ほど前に登った道をピサンへ下る。

久しぶりのベースハウスに到着する。高所用の衣類を脱ぎ捨ててキャラバン用に着替えし、宿の人がお湯を沸かしてくれてシャワーを浴びる。伸びたヒゲもそる。ツル君達は私の汚れた衣類を洗濯してくれた。

ピサンからカトマンズまで

7月19日 ピサンの村を下りる。来るときは6日間かかったが下山は5日間でベシサハールについた。来るときに見落としていた物が目に付く。7月23日にベシサハールに着いてカトマンズまでのバスの切符を買いに行ったが、この時期の特徴？で国道は何力所か土砂崩れでバスの運行は何時になるか分からない。仕方なくポカラに戻って空路カトマンズに帰ることとした。

カトマンズで約一週間滞在して、暑い日本に帰ったのは7月31日であった。今回の山旅の総費用は約30万円ですんだ。

2002年夏のグリンデルワルド

シュレックホルン (4078M)

への長い道

佐々木惣四郎

グリンデルワルドを中心としたペルーオーバーランド山系の1つであるシュレックホルンを真近に望んだのはメンピ登頂の時で、黒々とした岩峰の塊で、その難しさが予想された。

さらに1000Mのグリンデルワルドのテント場から2520Mのシュレックホルン小屋へ向かう途中、始めて正面にみた時の威圧感はずいいもので、約2000Mからの高度差からであったが、仰ぎ見る高さ岩峰に登頂意欲が萎縮してしまったくらいだ。

シュレックホルン小屋へは7月30日ガイド（33歳）と入ったのであるが誠に素晴らしいルートで3時間15分というスピードであったが勇んでついてゆく事ができた。小屋からの風景は、目の前に下グリンデルフルド氷河、上アイスメア氷河、フィンスターアルホルン、アイガー（裏側）が見える絶好の場所でヒマラヤの真っ只中に入った様でひさしぶりに胸ときめく風景であった。

7月31日 小屋での宿泊は13人だけで、頂上にむかうのは2パーティで朝1時に起床。雨が降っており、少し時間待ちして雨が止んだ1時50分 小屋出発した。小屋から上アイスメアまで下り、氷河の上をたどりシュレックホルンからでてきているモレーンと雪田の道を延々3時間程つめ（シュレックファイルン）、南西陵ルートの取り付きに5時ぎについた取り付きの手前のシュルンドが大きく開いており、ガイドが氷壁登りのスタイルで乗り越えたあと、案の定小生の時には足場が崩れザイルにぶらさがってしまった。シュルンドには1M強落ちただけであったので、ザイルに頼りながら突破して取り付きに着いた。ここでピッケル、アイゼンをデポ。

南西陵ルートの基部より600Mのカンテ状の岸壁をグレード3級ながらコンテとスタカットを MIXさせながら約20ピッチ強かせいだがFIXが全くなく、登っても登ってもカベが続きイヤになってしまう位で、ガイドの行くルートを進むことになるので高いスタンス、細かいホールドも多々あり体全体が疲れ切った頃、8時に稜線にでて8時44分 登頂できた。7時間の登行である。

頂上では10分間の休憩のみで2パーティだけであった。頂上よりの景色は素晴らしく高度感は抜群であった。天気は下り坂で帰りが悪いやられた。帰りは登りと同一ルートで頂上よりトラバースの後、天気の移りに追いつけられる様に懸垂下降の連続で始まった。クライミングダウンも多々くわえながら取り付までの懸垂下降は20-30M間隔で19回であった。取り付きからすぐ下のシュルンドは通常の下降が出来ず懸垂下降で乗り越えた。12時頃であった。ここからは雪とモレーンの上を延々と下降続け14時25分 小屋着で5時間30分の下降でかなり疲れたが久々のボ

リュウムある登行と下降で充実感に溢れた。12時間30分かかった事になる。

このあと15時に小屋をでてテントに向かう。17時40分 下降のロープウェイにつきテントへ18時に帰着。長い長い下りで足が痛くなったが今夏のスイスでの唯一の念願の登頂で満足感が足の痛みを越えた。

アイガー雑感

42年卒 山田 裕敏

数年前、マッターホルンを登ったあと、次は東山稜からのアイガーだと心に決めていた。

けれども具体的にそれがアイガーを構成する山稜のうちどの部分なのか、また下からはどう見えるのか等は頭に無く、ただ模さんが初踏破した稜線であって、難度の高い古典的ルートというイメージだけしか持ち合わせていなかった。グリンデルフルト（以下GW）のテント場に着いて先輩連から、あれが東山稜だと指差されて初めて“ああ、あの北壁の左端のスカイラインを作っている尾根なのだ”と認識するような始末だった。模さんが「山行」に「村の山といってもよいアイガーの、それも村の上に全線を示している東山稜が…」と記されているようにGWのどこからでもこの山稜は目に入り、これほど魅力的で村から指呼の間にある山稜が1921年まで未踏であったのはほとんど偶然だったのではと思うほどである。死者も出たし、その頃の登山技術ではそれだけ手ごわかったのだろう。登攀日前日、足慣らしに訪れたグロスシャイデックからは正面寄りの位置で眺める事となり、頂上直前はとりわけ急峻で垂直に近いイメージとなる。去年の佐々木惣四郎さんの記録にあった、かなり厳しそうな表現が思い出される。岩登りのトレーニングなどこの所やったことも無く来てしまったので、「どうかな」と緊張感が走る。

7月30日14時、組合事務所にて同行ガイド、“レジー”と合流。シャモニに定住するフランス人で組合間の提携関係からGWに出向いてきた由。ドイツ語はできず聞きやすい英語をしゃべる。山歴は相当ある

が東山稜は初めてだという。16 時ごろアイスメーヤ駅で下車しトンネルを少し下る。凍結しておりアイゼンがほしいほど。外へ出て上り気味のトラバースが始まる。登路自体はそれほどの傾斜でもないのだが、右側が大きく切れ落ちており、体も馴れておらず余り気持ちのいいルートではない。20mばかりの岩登り箇所のみザイルをつける。1 時間半くらいで小屋に着く。目の前にミッテルレギー = 東山稜が大きく聳えている。小雨模様で下界は見えない。レジーは外の廊下で衣類の着替えをしている間も小屋番の小母さんと激しくフランス語で喋っている。何か問題がありそうで、明朝のことは何も言うなとまだ聞いていないことに釘をさされる。中へ入る。イギリス人ガイドと2人の若者。ガイドなしのイギリス人中年者3名（内一人は美形の女性）、スペイン人青年2人、それに我々と小母ちゃん計11名。こじんまりした新しい小屋でテーブルを囲んで話が弾む。当然天気模様と明日の予定となるが、英人ガイドが同国人に盛んに何かをまくし立てている。スコットランド訛りが強く聞き取りにくい。上部ルートと下降部がこの雨で相当困難な状態となる、と身振り手振りを交えての説明だ。スペイン人達はレジーからスペイン語の解説を受けている。食事となりレジーがホスト役を務める。スイスの山小屋での数回の経験から見て一番のご馳走だった。こってりしたスープ、ポリウムのあるサラダ、スパゲッティにデザート。小屋は築後1年で、小母ちゃんに因ればユーコー・マキが相当寄付をした初代の小屋はアイガー・グレッチャー駅の近くに部分保存されているという。丁度80周年記念で建て替えたのだろう。横さんと3人のガイドの初踏破記念写真の銅版が飾られている。ユーコーの影響でこの小屋へは日本人がよく来るとの事である。

20 名ほどが収容できるコンパクトではあるが立派な小屋だ。

翌朝 3 時半に起きるが雨模様なので食事もとらずベッドに戻る。これまでの4日間の晴天を逃がしてしまい残念だとの思いが胸を過ぎる。4 時半に再度起きると雲の切れめに月が覗く。なぜか我々2人だけで朝食を採り5 時半に出発する。風はあるが視界は良好。暫くしてアイゼンをつける。緩急入り乱れたリッジを急ぎ足で登り切りグロッサー・ツルムに立つ。此处か

らは朝日を受けたミッテルレギー最後の登りが見渡せる。かなりの傾斜の岩場だがフィックス・ザイルも見えるし何とかかなりそう。調子はどうだと盛んに聞くので、今のところ楽しんでいる、と答える。右下はGWの牧草地が広がり、登山電車の軌道が見えるし、左側にはフィンスターアールホルン、シュレックホルン、ヴェッターホルン等ベルナーオーバーランドの山々が連なる見事な360度の展望を楽しむ。後ろからは結局誰も来ない。少し下ってからアイゼンをはずす。当初の不安感も消え、気力充実し最後の登りに向かう。先行きの天候を心配してレジーが先を急がせるものだから、折角の核心部もクライミングを楽しむというよりは、フィックスにつかまったごぼう抜きスタイルで追いかける。むやみに腕が疲れる。10 時半ごろ頂上に着き殆ど休まず下降に転じる。アップザイレン数回で最下部に届きここからメンヒの鞍部まで長い山稜を上り下りする。この辺りから曇りとなる。最後のメンヒ斜面のトラバースではガスがかかりレジーは地図と磁石を何度も取り出しルートを確認している。この雪のルートでは思わぬ落ち込みも発生するので、岩場と比べて極端に慎重な動き方をしていた。腕に頼った登りで相当エネルギーを使ったためか、勿論高度の影響もあって全身の倦怠感が強く15 時にメンヒ小屋横のコルに辿り着くまで実に苦しい歩行を続ける。小屋から駅までの30 分間は激しい降雪で、数日前の銀座通りの華やかさは嘘のようだった。終わってみれば、激しい登りの部分で十分に楽しみ、その分後半で苦しんだポリウムのある一日だった。スイス・アルプスの魅力はこの手軽なアプローチと骨の折れるルート、それにスタッフの揃っているガイド組合の存在が織り成す物だと思う。

帰日してから改めて横さんの「私の山旅」1968 年岩波新書を読んで昔を振り返ってみた。その中で感心したのは、大正末年（1926 年）の秩父宮殿下の山歴である。先に書いたベルナーオーバーランドの3山はもとより、マッターホルン（スイス側からイタリア側へ）、チナルトルートホルン、モンテローザ、リスカム等をひと夏でこなしている。これらの山は小生が経験し、或いはこれから登ろうかという対象ばかりではないか。山の宮様と呼ばれていたのは知っているが、ここまでやっていたとは知らなかった。日本の皇室も

たいした物だったわけだ。皇族や華族・貴族にもっと自主性が在ったのだろう。こういうことは30数年前に読んだはずだが全く頭に残っていない。これから経験した事を本で確認する喜びと、新しく読み聞きする面白い事の体験に、外へ出る楽しみを続けてゆきたい。以上

アレッチホルン半周記

小笹 孝

まえおき

アレッチホルンの名や位置を知らなくても、アルプス随一の長大さを誇る大アレッチ氷河をご存じの方は多いのではないのでしょうか。クライネシャイデックからの登山電車がユングフラウヨッホに着き、掘りっぱなしのトンネル内の駅から展望台に出ると其処はもう白銀の世界。北西側はグッギ氷河がメンヒの西面を削って鋭く且つ短く落ちているのに対し、東南側はユングフラウフィルンが広くゆったりと高度を下げ、コンコルディアプラッツからは大アレッチ氷河と名を変えて大きく右方向に曲がってゆく様が、そのスケールをまるで感じさせない程に大きく広がっています。

アレッチホルンそのものは、ユングフラウから東南に延びる支尾根が障害となり、ピラミダルな頂上部分を覗かせるのみで、鋭さもなく、一向に観光客の目を引く気配はありません。しかし、この山はベルナーアルプス第2の高さを持ち、山容が大きいだけに、見る側の位置が高くなるに従って、自ずとそのヴォリュームを実感されるものと思います。

東西方向に真っ白な両翼を大きく広げてアルプスの奥深く鎮座する、そんなアレッチホルンを見たのは1997年の夏。上堂兄と私にとっては初めての4000m峰・フィシャーホルンの頂上からでした。いつかはあの山にも登りたいなー、と微かに思いました。また、コンコルディア小屋から暮れなすむレッチェンリュックを遠く眺めては、“山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う・・・” カール・プッセの詩をガラにも

なく想いおこし、あの峠に立ってみたいものだと思われました。

そんな想いが重なって、やや強引に上堂兄を誘い込んでの今回の試みで、我々の予定したコースは次のとおりです。

第1日 ユングフラウヨッホ→コンコルディアプラッツ→ホランディア小屋

第2日 小屋→ザッテルホルン→アレッチホルン→ホランディア小屋に往路に戻る

第3日 小屋→レッチェンタールのファフラーアルプに下り、ゴッペンシュタインへ

今年のヨーロッパの天候は真に不順でスイスもその例に漏れず、昨冬の降雪量が極めて少なく、夏初めの6月は炎天が続いたかと思うと、一転して7月には雨が多くなったとのこと。（そして8月中旬のいま、中欧各地に洪水が起り大きな被害をもたらしています）それが高所では雪となり、低所の残雪が少ないのとは逆に、3300m付近から上部は柔らかな雪がかなり積もった状況でした。

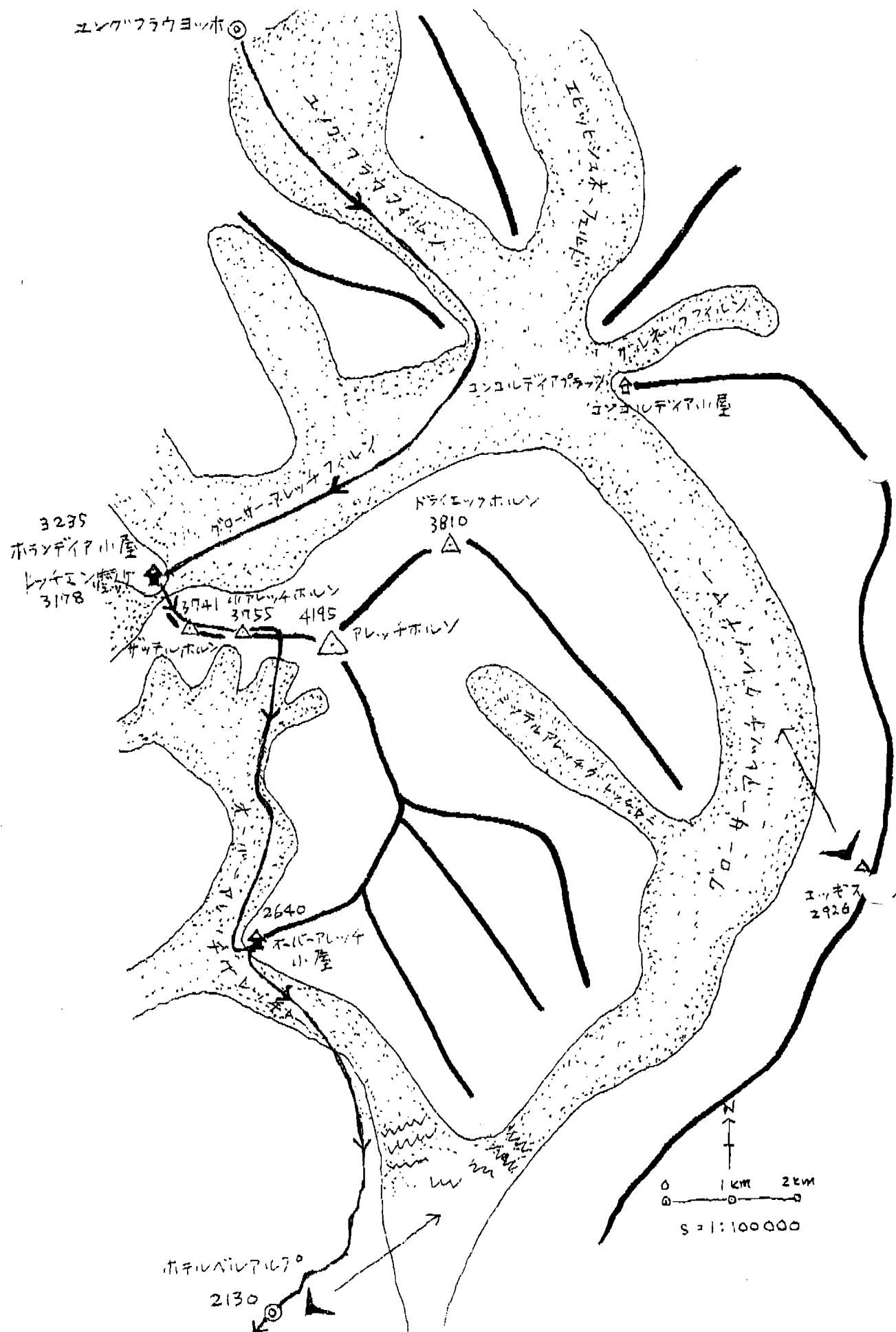
そんなことで、例年とは逆に先に訪れたツエルマットでは、佐々木と目指したオーベルガーベルホルンも連日の降雪でコンディション悪く、マッターホルンやチナールロートホルン等とともにガイドは出勤しない日々が続きました。ブライトホルンに3回も出かけながら1週間も待った挙げ句に天気予報は好転せず、ついには諦めて、後発の上堂・山田両兄と合流するべくグリーンデルワルトに移動したのが7月25日。

同日、関空を発った後発組の高度順化を図ってメンヒスヨッホ小屋に一泊の後メンヒ登頂28日。29日を休養ハイキングに当て、30日から各自所期の山に向かいました。

7月30日 晴れのち曇り

小屋までのアプローチが短くて午後立ちとなる、ミッテルレギの山田、シュレックホルンの佐々木、両兄の見送りを受けて6時40分テント場・グレッチャードルフを出る。

ガイド2名とグリーンデルワルト駅で落ち合うつもりが、現れたのは、過日ガイド組合で偶々出会いの完了



していたアンドレアス・アベグレンー人。グリンデルフルト出身、25歳の元気な若者で、ここでは最年少ガイドらしい。

もう一人とはユングフラウヨッホ駅で合流。ステファン・ヴェルツ43歳、ダヴォス出身の物静かな長身。

一番電車もほぼ満席状態。トンネルを出ると陽光が眩しい。直ちにアンザイレンとなって、アンドレアスは一端を上堂兄に差し出し、私はステファンと組むことになる。

歩き出して間無しに名前を呼ぶ声に振り返ると U 氏がコンコルディアまで同行したいとのこと。U 氏と過去2回ツエルマットのテント場で出会っており、グリンデルフルトでは今回が初めて。彼はいつも独りで来ていて、山小屋に滞留しながらガイドを物色しては4000m峰ハンティングをされているとか。我々よりほんの少し若い分、元気を持ち合わせた、ちょっとユニークな方で、衣服や所持品一切に名前を書き込んで万に備えられています。

単調な氷河の下りを2時間近くも続けて漸くコンコルディアプラッツ北西角のモレーン上で小休止。行く手のグローサー・アレッチフィルンを見上げると、これも馬鹿でかい幅で、ゆったりとうねりながらレッチェンリュッケに収収しています。何時間？ と問えばややあって、4時間！ との応え。このクソ暑い中を4時間かー！！ 歩数でも数えながら歩くほかに途は有りません。

その内にクレヴァスが頻繁に現れるようになり、2組が一本に繋がる。ユングフラウフィルンの場合もそうでしたが、ゆったりと大きなリズムの緩急のうねりの中で、クレヴァスは緩傾斜部分に多く出てくるのには、何故か合点がゆきませんでした。

アレッチホルン北壁の東端とも言えるハスラーリッペは、700mの高度差をほぼ一直線に、ちいさな背鰭を立てたような状態で這い上がっており、おまえはもう若くは無いぞッ、とまるで無愛想に我々を見下ろしています。今回チョイスしなくて良かったかも。

暑さにうんざりする頃には、真っ白な流線型のグライダーが、風きり音を唸らせながら飛んできて吃驚したり、落氷による雪崩が音もなく北壁に落ちるのを見ては退屈を紛らわせながら、4時間かっきりで小屋到

着。明日のザッテルホルンの斜面が小屋のテラスの目の前ですが、上部は既に雲の中。風を頼りに湿ったものを乾かす。

美味しい夕食を腹一杯に頂き、二人は早めに寝室に引き上げる。20人近く入れそうな一部屋を我々が占領し、好きな場所に横になる。雲が全天を覆っているがそれほど厚くはなさそう。明日は明日の風が吹くことを期待して、オ・ヤ・ス・ミ・ー

ユングフラウヨッホ9:30—11:15コンコルディア11:30—

—13:05中間点13:30—15:30ホルンディア小屋

7月31日 曇りのち小雨 15時頃より夜中まで雨

昨晚、食堂から引き上げる前に起床時間を聞くと、3時と考えているが天候次第、と言っていたアンドレアスが4時になっても起こしに来ない。小屋の収容人員は60人を下るまいと思えるのに我々以外の相客僅かに4人。静まりかえっている。

確かに昨晚は谷にもびっしり雲が押し寄せていたが、レッチェンタールに面した窓を開けるとブラッテンやその下流の村々か、灯火が瞬いている。オッ！星が出ているではないか！ 雲が多いが、その切れ間には星がぼやけずに見える。アリガタイッ！

出発前日のガイド組合で、30日は保つが31日は崩れる虞、と告げられて気になっていた天気も何とかなりそう。準備を整え終わった頃にアンドレアスがやってきて食事に誘う。もう5時をとくに過ぎているーッ。

今日はこちらに戻れるかどうか判らないので荷物は一切残さないように、と言われて選り分けていたものも全て詰める。山小屋での朝の支度にしては実にのんびりした事になり、ミッタークホルン方向に向かう2名と同時の出発となりました。

小屋からコルに少し降り、突き出た岩の左側の雪面に残されたステップに従う。取り付きこそ締まっていた雪が20mも登らない内に柔らかくなり、まるで日本の春山状態。傾斜こそ、案内書通り50度を越すピッチが現れてくるが面白くもなく、ガイドの2~3m後ろをただ黙々とついて行く。スタート時点で既にフ

インステラールホルンを初め周りの山々の頂上部は雲に隠れ、今は行く手も霧の中。

1時間も登っただろうか、漸く氷化したピッチに出て喜んだのも束の間、10mも登るとまたも軟雪。しかしこの氷化した斜面が出てきた途端に、ステファンはまるで走るが如く駆け上がり、両者の間隔を今までの2mから10mにして、私がそのピッチを登っている間に、また元の間隔にと戻していった馬力と巧みなザイル捌きには恐れ入りました。

ザッテルホルンへの登りは尾根と言うよりも、北壁帯の西端をなす雪壁で、未だあまり陽が当たらない。しかし連日の降雪で、常に足首から膝下まで潜り、時としてセカンドでも膝上までズボット入る。トップの苦労を思いやりながら、未だかー、未だかー、と思っていると、頂上から少し東よりの主稜線に突如飛び出した感じ。

途端に南に向かって青空が広がり、背後のベルナーアルプスが何も見えないにも拘わらず、遠くヴァリスの山々が、乱れた雲が舞い上がっている谷も有るものの、マッターホルンの北壁までも殆ど真っ白になっているのには驚きました。

左手、ガスの向こうには目指すアレッチホルンの頂上が400m余とは思えない高度差で聳え立ち、のし掛かってくるような威圧感にたじろいだのも束の間、ふたたび雲の中。

小休止の後、東に向かって主稜線を辿る。今までとは打って変わり、かなり細いスノーリッジを慎重に通過する場面も出てくる。左足下は北壁が切れ落ちている筈ながら、下が見えないから気楽なもの。エキスポーズなルートだからガイド一人に客二人は無理だ、とガイド組合が言っていた理由もこの辺のことかな、と善意の納得。

極めて僅かな登り降りの内にクライン・アレッチの頂上に着き、着いたと同時に、それぞれガイドが私たちに手を差し伸べて握手となってしまいました。

口には出ませんが、ナンデコンナトコデ握手ヤネン？ 頂上チャウヤンケ！

そんな思いと裏腹に、ヤレヤレ、コレデ楽ニナレルノカナ？！

どっちが本心だって？ 勿論前者で有った、と今も思ってますよーッ！！

10m足らずの間隔を保ちながら、4人が一本に繋がってオーベルアレッチ氷河を降り始めました。漂うが如く、右に左にクレヴァスを避けての降りは結構時間を要します。昨日も今日もアンドレアスがトップですが、後ろから見てみると氷河上の彼は実に慎重であり、よく先を読んで進路を定めていることが判ります。それでも、上から飛び下りる事で越えることが出来た深いクレヴァスも有れば、滑り台よろしくズルズルと滑り降りたスノーブリッジもありました。脚の太さの丸い穴の奥は真っ暗なんて光景を何度も見ていると、こんな所を一人で歩くななんてことは、とてもじゃないが願ひ下げです。

3000m付近まで下りてくると、氷河も落とし穴を隠すような意地悪を止め、表面には大小のモレーンが段々と増えてきました。その頃から霰がパラツキ始め、直ぐ雨にと変わりましたので、皆大急ぎで雨具を引っ張り出しての小休止。

2700m付近からは氷を踏むことは殆ど無く、左岸よりに、殺風景な賽の河原歩きが続きました。オーベルアレッチ氷河がほぼ直角に左に曲がる地点で、漸く今宵の泊まり場オーベルアレッチ小屋を頭上に仰ぎ見ます。氷河が溶けて表面が数十メートルも低下し、小屋ばかりが側壁に取り残された結果、梯子やロープを頼りの急崖登りを嫌がったのでは辿り着けなくなったのです。有り難さ一入です。

今宵の相客はたったの一人。我々が小屋に着いたときには既にワインを独り奮めていましたが、夕食中も、食後も、デカンターを取り替えてはそれが続くのには驚きました。お陰で、上堂兄は二人分のデザートにありつくことが出来ました。

ホランディア小屋6：35——8：00ザッテルホルン8：20——9：10クライン アレッチホルン9：30——11：30小休止（2700m付近）11：50——
——13：30小屋下14：00——14：15オーベルアレッチ小屋

8月1日 曇りのち晴れ

ベルアルプからこの小屋までは一応青マークのハイキングコースになっていますが、昨日最後の歓迎をしてくれた急崖を慎重に下り、目を魅める緑のアルプもなく切り立った U 字谷の底でのモレーン歩きが今日のスタートです。

オーベルアレッチ氷河は大アレッチ氷河に合流する手前およそ2 kmの地点で消滅していますが、その末端付近で谷は急速に狭まり、そして落ち込んでいる様子。道は落ち口直前の右岸側壁を乗り越えてゆきます。つるつるの岩壁に辛うじて引っ掛かったような粘土質の足場と固定ロープを頼りに、黄泉の国から脱出する伊弉諾尊よろしく回り込んでゆきますと、今までの殺風景な景観が一転して緑豊かなベルアルプが眼下に開けました。救われたようにホッとしました。小さな教会のちいさな尖塔とホテル・ベルアルプがほぼ同じ高さに、手の届くように見え、未だ1時間余りも歩かねばならないとは思えません。

ブラッテンへ降りるゴンドラには中間駅がありました。中間駅と言えば、シエールからクラン・モンタナに上がるフニクラーレには複数の中間駅が有り、驚きました。斜面に住んでいるスイス人は脚力が強いばかりではなく、ワイヤーロープ利用の達人だ、と感心しています。

ブラッテンからはPTバスでブリークに出て、当初の予定で下りてくる筈だったゴッペンシュタインを経てグリンデルワルトに戻りました。降り出した雨と競争で大急ぎでテントをたたみ、ワルトホテル・ベラリーの中島正晃さんとブラックが、車で拾いに来てくれるのを待つうちに今回の山旅も終了です。

アレッチホルンの北側を西行したのち南下して、さらに南面を東行した経路は、ちょうど同峰を半周した形です。梯子以外には攀ることこそ殆ど有りませんが、よく歩きました。

小屋7:00——右岸乗越点下——10:25ホテルベルアルプ11:00——
——11:15ゴンドラ乗り場——ブラッテン——

ブリーク——グリンデルワルト

あとがき

ガイド組合のメニューにもない夏のアレッチホルンで静かな山歩きを楽しみました。案内書(ハンス・グロッツセン著 近藤 等訳 ベルナー・オーバーラント)に依れば、ホランディア小屋〜コンコルディア小屋の縦走は11〜15時間となっており、我々がクライン・アレッチまでに要した時間、約3時間足らずは、決して遅くはない、と思います。さりながら、クライン・アレッチ止まりとなってしまったことは実に残念です。

アンドレアスが3時に起きた時には、谷は雲で埋まっていた、と言う彼の言葉を信じれば、出発が遅くなってしまった事はやむを得ないこと。さらには、彼等が握手の手を差し伸べて下山と決定したのも、午後の天候の推移を考えれば、実に彼等は正しかったと言わざるを得ません。

一書(アルプス4000m峰 登山ガイド)に依れば、雪の蓄いたアレッチホルン南西稜上部を下降する時のルート判断は困難、と記されており、視界不良となれば尚更でしょう。

東北東稜を降ってコンコルディア小屋に抜けるデは有ったと思うのですが、もう過ぎたこと、と諦めましょう。でも、1900フランは痛いよナー。

以上

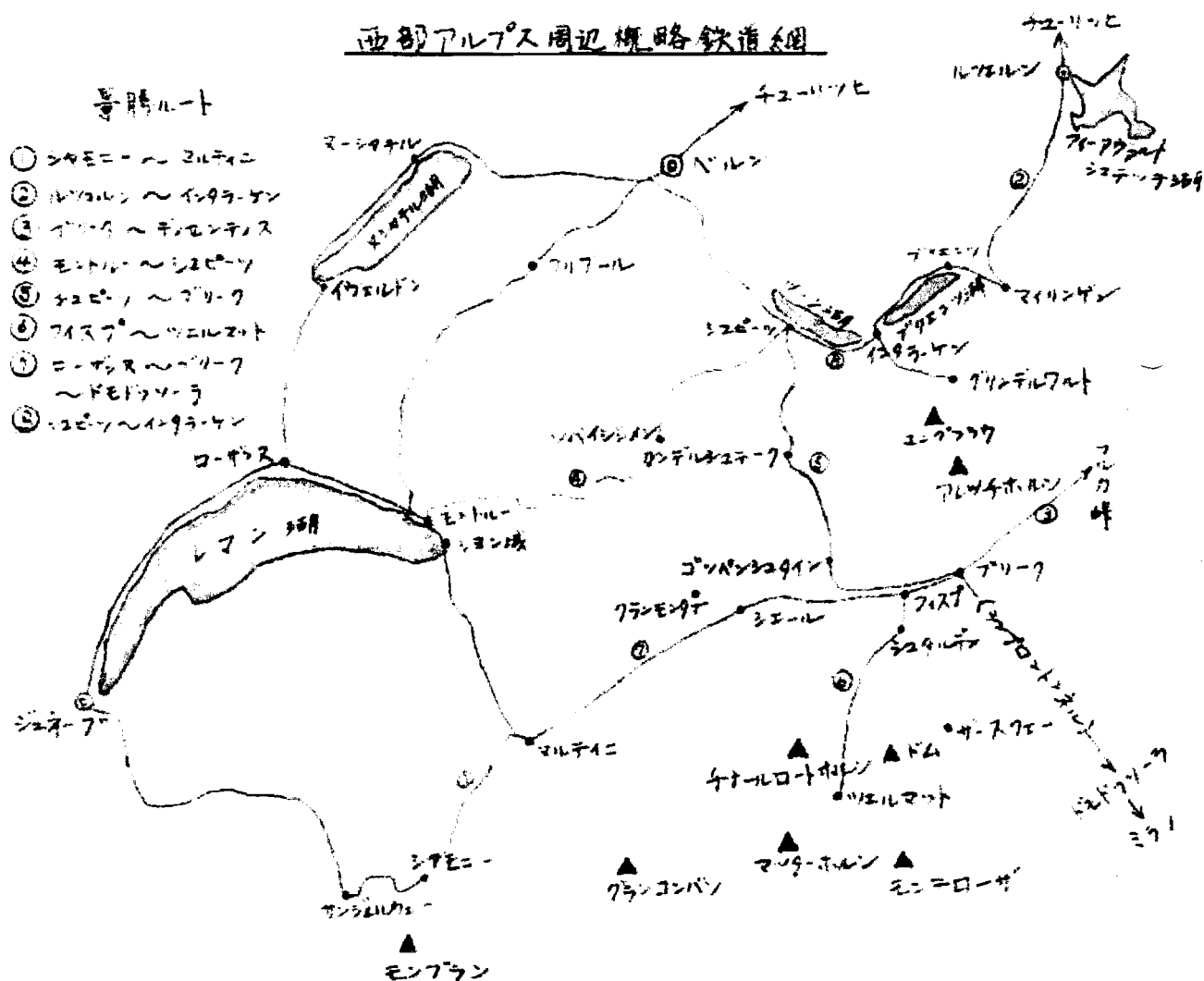
ガイドのアベグレン (25歳)

上堂竹壽

アレッチホルン・2泊3日小屋泊まりの山行に必要な装備が30Lのmammutのリュックに全て収まっている。見事である。登攀用具一式・50mのロープ・クランボン・ハーネス・昼食・水筒・雨具・小型のルート図(写真入り)等。短いスチールシャフトのアイスアックスを常に左の小脇にかかえている。なか

なか恰好良い。ストックは持っていない、十分にバ
ンスが良いので不要(私には必要)。即ち必要かつ十分
にして最小の持ち物、物に頼る事と持ちすぎに注意。
衣類は三日間を通して出発時に身に着けていた物のみ
雨具はたいへん薄い上下、下は腰まで開いたチャック
付きでクランポンを付けたままで着脱できるもの、足
元は革靴でスパッツではなくズボンしたに薄いゲート
ルを丁寧にまきつけている。手袋は皮の防寒用、帽子
だけアプローチ時と登攀時と変えていた。夏のシーズ
ンの寒暖の差は鍛えられた体で十分に対応出来るのだ
ろう。昼食(行動食)は、サラミ・チーズ・堅いパン・
チョコレート少々、それに毎日小屋で入れるハーブティ

ー1L(テルモスでなく水筒)。と簡素であるが小屋
での夕食と朝食の摂取量はかなり多いし、内容が充実
しているのうまく釣り合っている。スープ・メイン
ディッシュ・デザート・パン等、デザート以外はお代
わり自由である。食事の作法の良さ、なめるように食
べるとはこのことかと思わせる。行動に移れば的確な
判断と危険を避けるため時間を大切に、早く安全な
場所へ移動する。ハーネスは小屋を出て小屋に着くま
で装着。思うに食事と体力の差を少しでも縮める努力
が必要。そうでないとせっかくのガイドとの山行が楽
しくない。



クラシックルート

「燕岳から蝶が岳へ」を歩く

上田忠士

夏の山岳会公式行事であったが、コースがあまりにもポピュラーなのか、日が悪いのか参加者が少なく3人。「のんびり行こうぜ」で出かけた。

メンバー：佐々木、上田、大島

8月13日(晴れ)

佐々木、大島は大阪から、上田は名古屋から雪線へ。18:00集合。名古屋からは景色のよい国道153号を走る。約4時間。高速料金4300円が助かる。夜は温泉のあと、ビールで乾杯。明日からの好天を祈る。3人では歌も出ない。就寝22:00

8月14日(曇り)

雪線5:50—三股7:15—中房温泉出発8:55—合戦小屋11:40—燕岳TS12:30
起床5:10 車2台で出発。起床後40分で出発とは早い。上田車を下山予定の三股に置く。大きな駐車場問題なし。大島車に3人乗り中房温泉へ、駐車。暑い中を急な合戦尾根にとりつく。何と言っても表銀座の入り口、われわれを含め、中年、初老の登山者が多い。合戦小屋で一切れ(その割には大きい)800円のスイカを食べる。50人ぐらい休憩していた。ここからやや傾斜がゆるくなり、お城のような燕山荘直下のTSへ。佐々木が先行して場所を確保。ここは30張り程度の広さ。遅くなるとかなりの傾斜地に張ることになる。1人500円、水1リットル200円。燕岳往復1時間。2500Mより上部はガスの中。硫黄尾根はよく見えたが、槍、穂高がガスの中。夜中より雨。

8月15日(雨。ガス)

TS 6:50—天山荘(9:15—9:40)—常念峠TS 11:50
起床5:00 濃いガスの中。雨が止んだときテント

撤収。あまり高低のない縦走路を天山荘まで、小雨とガスの中。視界100—200m。コマクサだけが足元によく見えた。天山荘で立ったまま雨宿り25分。雨の中を常念に向かう。小さなピークを三つ巻き、ノンストップ2時間10分でTSへ。3人ずぶぬれ。靴下を絞ってテントの中に吊るす。夕食は大島献立のブタ角煮どんぶり。残りわずかなウイスキー、焼酎を飲み干す。となりのテントの携帯電話がうるさい。ここもテント1人500円、水1リットル150円。

8月16日(晴れ)

TS 5:55—常念岳(7:00—7:20)—蝶ヶ岳10:20—蝶ヶ岳ヒュッテ(11:00—11:20)—三股14:20

今日はfine。早朝テントから出て槍の穂先を見る。東に向けば sunrise。さすがにこのコースは槍、穂高の展望台だけあって、常念頂上からはすばらしい眺め。前穂高北尾根、明神岳、横尾本谷、

キレット、A 沢の ool、懐かしいところだ。蝶ヶ岳へ向かう途中からガスが出て遠望がきかなくなった。蝶ヶ岳ヒュッテでエッセン。三股への下りは長く、1200mの下りだ。三股で上田車に乗り、中房温泉へ大島車回収に行く。31km。タクシーだと11000円とあとで聞いた。

雪線到着18:00。久保田先輩が「ひやむぎ」を用意してくれており、いただく。

Many thanks.

8月17日

午前中涼しい内に4人で雪線周辺の夏草刈り取り。きれいになりました。11時大阪、名古屋へ。久保田さんは今夜も泊まりました。

このコースはいわば初心者向き、小屋泊まりならいつまでも(?) 楽しめるところ。

10年先に再度行きましょう。